

□新しい美の世界

す 草

誰でも繪畫を學ぶものゝ總て經驗する所であらうが、僕の繪畫を學んだ爲に得た最も著しい利益は、批評眼と鑑賞眼と觀察眼とを養ひ得て、隨て又今迄よりは非常に樂しみの多い生活を爲す事が出来る様に成つた事である。展覽會、新聞雜誌の挿繪口繪、其他繪葉書などに至る迄、今迄は單に美しいと見て心地好いかいふ外には、何の興味も感じなかつたのが、繪畫を學び始めてからは一寸した新聞の挿繪や雜誌の口繪などにも、限無き趣味を感じる事が出来る様になつた。

又今迄は極々平凡なつまらないと思つて居た景色の中にも、到る處それの美を發見する事が出来、草木鳥獸、水の流山の姿、波の起伏雲のたゞつまひ、總ての物の形と色とその特徴とが明かに眼に入り、散歩に旅行に、其他有らゆる場合總ての物に或美しい感興を引起す事が出来る様になつた。此事は繪畫に興味を持たぬ人と散歩する時など殊に深く感ずるのである。又旅行などして氣に入つた景色をスケッチブックに納め、歸つてから時々出して見る時の樂しさ、到底經驗のない者に

は想像も出来ないであらう。

繪畫を始めてから僕には一の新しい美の世界が開けた様で、行住坐臥常に無限の趣味と無限の慰藉とを得つゝあるのである。僕は自ら樂しみ多き、美しい、趣味ある、此多幸なる生活を爲し得るやうになつたのを誇ると共に、世の青年諸君が亦此美しい趣味を味はひ樂しい生活を得られん事を希望するのである。

□弟より自筆の繪葉書

伯耆 幽 溪 生

僕は先天的惡筆で、學生時代には習字も圖畫も劣點あつた、然も性來繪畫、就中洋畫は好きであつたが、美術學校に其教を受くるに非ざれば到底不可能事として、唯人の畫を見て樂で居た。偶郷里中學に在る舍弟より、自筆の繪葉書を呉れたのが僕の水繪に志せし動機と云へば云ふので、僕は今土木工學を卒へて職を奉ずる身で、同じ繪具同じ彩筆を以て製圖するのであるから、少しく其素養を得たならば繪葉書位何かあらんと思立たのである。恰も其當時に『みづゑ』が生れた故直に購

讀者の一人に加はり、參考書畫も數冊求めた中でも『水彩畫階梯』は唯一の教師と頼み爾來之れが研究に勵みつゝあるが、僻地の悲さには大家の肉筆を見る事叶はず、又た己を得ず印刷物に由て其調子を知る位で、最初は製圖彩色法が先入主となり、兎角單彩法に陥り、到底僕は筆の人に非ずと嘆じ、既に全く之を廢さんとせし時に、知人が露國の有名なる畫家の手に成た風景畫二葉を得て、之を貸與して呉れたので始めて、肉筆に接する事が出来彩法に就て大に得る所あり、乃ち腐心を蹴し更に彩畫に熱中する様に爲つた。

水彩畫を學びし結果は、工業の製圖に彩色する簡便法を悟り、繪具を節約するを得て、從來無駄に溶て使用の量より捨てる量多し等の風習は自然と失せて、彩色に當て臆す事なく落付て如何に廣き面積も鮮かに彩色する事容易となり、規定になき色素も咄嗟に調合し得る利益を得た。又た再三有べからざる事なれども、失策の部分を能く修正する法も覺えた。之等は得たる利益の顯著なる者である。

* * * * *